

認知症は 年をとれば誰にでも可能性のある『病気』

ど忘れやもの忘れは年をとると共にひどくなりますが、これを認知症といいません。認知症は年相応を越えたもの忘れや、場所・時間が分からない、判断力低下、段取りよく物事を行えないなどの認知機能の障害が出て日常生活が困難になる「病気」です。症状がすすむと徘徊、妄想、興奮、昼夜逆転などの周辺症状が見られるようになります。「脳の障害による病気」で、多くはアルツハイマー病や脳梗塞などの脳血管疾患が原因です。

認知症は高齢になるほど起こりやすく、85歳以上の方の27.3%と4人から3人に一人が認知症になりますから、誰でもかかる可能性のある病気です。最近薬物療法が開発され、頭を使って脳を活性化する療法などと組み合わせれば症状の進行を遅らせることが期待できますが、早期発見や早期治療が大切です。家族や地域のあたたかな見守りや支援があれば、自宅で暮らし続けることもできます。認知症に対する正しい理解が求められています。

